

せたと同様に、「マルクおいて求められる奇跡の瞬間からマルクス以上のものを引き出すことに成功した」と位置づけられる。然るに、批判的意義が改めて論じられるが、そこで「構成的権力」論のネグリよりもむしろレーニン「命」における法権の死滅、グロリアのほうにラディカルに捉え、レーニンから引き継ぎ、具体的な内容も多々含まれ、具体的

田中 純著

イメージの自然史

天使から貝殻まで

表面のイメージ(＝図像)の内部に隠れた異なるイメージを精妙かつ大胆に暴き出す作業でも言えるだろう。人文科学と自然科学の区別を越え文化知の新たなありかたを探ろうと意欲的に学術的著作を物している田中純氏のリストにさらし、二ページが加わった。その名は、『イメージの自然史』。



イメージの自然史
天使から貝殻まで
田中純 著

A5判・531頁・3780円
羽鳥書店
978-4-904702-11-6

巨人の下半身は人魚

ほとぼしる詩的想像力!

関本 英太郎

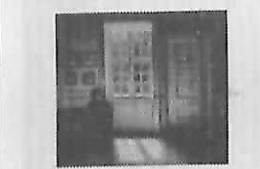
一部紹介すれば、ダーウソンの専門家として精力的にインやロジェ・カイヨワなことを引き合いに出し、人間のイメージに昆虫の痕跡を発見する、ポーランドの作家フルノ・シュルツや歐手ヒョークからは、幼形成を堂々と宣言するマンガ家、模図かすおへの注目。天使と眼の異常な結びつき

よびほとぼしる詩的想像力ではないだろうか。たとえば、トマス・ホプスの国

学術思想

『シモーヌ・ヴェイユの詩学』と題された本書は、そのものを論ずるものではない。さほど詩を残さなかったヴェイユは、しかし、「民衆は詩をパンとして必要とする」と説く(14)で不幸や悲愴のうちにあってこそ湧出する、現象の世界では見つけがたい「リアル」な美の感情を引きおこす可能性を詩に託している。本書はヴェイユにおけるこうした「詩」の可能性に導かれ、そもそも意味での「美学」を頭わにしようとするものである。全五部、計十五章にわたるこの大著は、労働、判断力、愛、善、芸術、創造といったさまざまな角度から、いかにしてわれわれが、ヴェイユの言う「自己を無にする」ことを通じ、世界の存在そのものの美に触れ、自己とは異なる他者や世界へと開かれるかを描き出すのである。この点で、これまで類書なかったヴェイユ美学の提示であると同時に、詩とは美とは何かを考え、感じよう

研究者のW・レペニスの『自然誌の終焉』などで表された、ヨーロッパ科学界に注目することにより、ドイツの科学者のG・T・H・フェヒナーと画家のターナーとアニメ作家の押井守の間の類似性を発見する。著者自身、これまでアヒル・ヴァールベルク、J・デュー・ユベルマン、ジョルジュ・アガンベン、W・ベンヤミンらの特徴あるイメージ論や、さらには思想としての構造主義と精神分析



シモーヌ・ヴェイユの詩学
田中純 著

四六判・427頁・2940円
慶應義塾大学出版会
978-4-7664-1728-9

格好の思索への誘い

詩とは美とは何かを考える者にとって

渡名喜庸哲